



すれ違いから出会いへ

10月×日

今日は人権教育の研究大会だ。午後の分科会ではどんなレポートが出てくるだろう。

分科会と言えば、質疑応答とか総括討論の時間って苦手だ。司会者の「だれか意見はありませんか?」の後の沈黙の時間。ああいやだ。今日も沈黙に耐えきれず、つい意見を言ってしまった。「あの、ジェンダーって人権の大切な課題だと思うのですが、やっておられる方がいらしたら参考にしたいので、ぜひ聞かせていただけませんか?」

しまった。どうやらビーンポールを放ってしまったらしい。だれも何も言わないやorz。

* * *

分科会終了後、小学校の教員が来られて、「うちの学校では性教育の時に少しひとりあげています」と話してくださいました。知り合いの高校教員は「〇〇高校では女子もズボンを選べるのです」と話されました。お二人の話を聞いてわかりました。みなさん、わたしが言った「ジェンダー」を「トランスジェンダー(GID)」と勘違いされていたようなのです。なるほど、どこもやっていないわけです。それにしても、こうした勘違いの言葉を聞いて、「考えなきゃならない課題と認識されるようになったんだなあ」という気持ちと、「これでいいんだろうか」という気持ちが入り交じった、とても複雑な気持ちになりました。

その複雑な気持ちを説明するために、7月号で紹介した全国キリスト教学校人権教育セミナー(以下、セミナーと略)を例にとってみます。

このセミナーでは、1994年に「性差別を問い合わせ直す教育」という分科会が設置されました。ところが、1999年に開催されたセミナーで、「性差別—性的少数者の人権—」という分科会になり、それ以降、2004年までの6年間は「性差別」と言えば「性的少数者」という時代が続きました。

わたしはその間、ずっとこの分科会に注目をしてきました。なぜなら、「人権」と名のつくセミ

ナーで、性的少数者を継続的にひとつの分科会としてとりあげている団体は、他に思いつくことができないからです。そして、自分の最も切実な課題を考えてくれるこのセミナーの存在を、とてもうれしく思っていました。しかし一方で、どこか釈然としない思いがずっとありました。それは、出発点である「女性」のおかれた状況ははたして解決しているのかという想いでした。さらに言うならば、「ひさしを借りたつもりが母屋を乗っ取ってしまったのではないか」という想いでした。

「性差別」という言葉を前にした時、「関係ない」と言える人は誰もいないと思います。しかし、「性の多様性」という概念は、そこからの逃げ道をつくってしまうのかもしれません。つまり、「性差別」から「性的少数者」へとずらすことによって、「ジェンダーの当事者のわたしのこと」から「性的少数者の誰かのこと」へと問題をすりかえることを可能にしてしまうのではないでしょうか。「性差別を問い合わせ直す教育」という分科会がいつのまにか消滅してしまったことを知った時、こうした思いが頭から離れませんでした。

「しかし」と、一方で思います。わたしたちは本来、だれもが多様なセクシュアリティを生きる当事者であるはずです。ところが、画一的な生き方を強いるこの社会の圧力の中で、わたしたちはその多様性に気づかなくされています。セクシュアリティについて考えることは、わたしたち自身がその多様性をとりもどすことに他ならないと思います。「性的少数者の誰か」の存在は、その多様性に気づくきっかけなんだと思います。

もちろん、多様性をとりもどす営みの中には、時として自分自身の価値観を変える痛みをともなうこともあります。それは、LGBTI当事者にとってもまた同じです。しかし、その営みを続ける中から、この社会の「性差別」を問い合わせ、それと闘う力もまた与えられるのではないかと思います。

(土肥いつき 高校教員)